

第1章 「もの」と「こと」の意味論 ⑩

前おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第十節 「ものがたり」と「ことわざ」

やまとことばでは「ものがたり」とは言うが「ことがたり」とは言わない。同じように「ことわざ」を「ものわざ」とは言わない。『天理教教典』第三章「元の理」の台本となった「こうき話」は親神による人間創造救済の「ものがたり」であり、「ことがたり」ではない。「こと」とは、「ものがたり」である「元の理」に起因した、つとめやすけによるたとえば宗教体験実話をなさしめたさまざまな「出来事」のことを指して言う。「もの」から「こと」の真実があらわにされるのであった。大野晋は「もの」を時間的に不変の存在としてとらえ、抽象化された場合には、確実で動かしがたい事実、不変の法則を指すこととなったと『日本語をさかのぼる』(岩波新書)において説いている。これに対して「こと」は時間的に推移し進行してゆく出来事や行為を指すと定義している。大野の説明にしたがえば、布教伝道や求道体験の“内質”が活字化されたとき、それは「ものがたり」にもなり、その中には教理に触発された「ことわざ」的なことばや、ひとつの倫理・思想的なものが創出されてくることがあるといえよう。大野はやまとことばをこれ以上分析できないところまで分析して、それを一応、語源とし一覧表を作成すればその語数はおよそ1,300語程度になると述べ、その見本としてア行の語彙を4頁にわたって掲げている(前掲書146～149頁)。

一方、荒木博之によれば、「ことわざ」とはある生起転回してゆく「こと」、事件に際して「言語」の内的威力によって人を動かす言語の技芸であると説明される(『やまとことばの人類学』朝日選書、116～142頁)。そしてこの場合、「こと」は「ことば」及び、一回的事件としての「こと」という意味の両義性をその深奥に秘めていると説明される。「ものがたり」が「世の原理・法則についての、あるいは原理・法則をしらしめるための説話」であるのに対して、「ことわざ」は、非原理的・一回的「こと」にかかわる言語の技芸であったと説明する。荒木はその「ことわざ」にきわめて近い機能をもったものに「標語」という日本の言語の氾濫する技をあげている。例を挙げればきりが無いが、たとえばもつともわれわれの耳目にふれる機会が多いのは各地方自治体が「交通安全宣言都市」などという大きな看板を市の中心街に立てかけていて、その市町村が看板の内容に合致した都市であることを内外に宣言している。この種の立て看板は日本のどの市町村でも日常の見慣れた光景になっている。荒木は日本人はかく宣言することによって、その内容が自らの現実となって与えられていると堅く信じているふしがあり、これが即ち日本人の言語の内在的な力に対する今に至る古代信仰の連続であるだろうと解説する。くわえて行事や「こと」に際して募集される「標語」は無数にと言つてよいほど存在する。「せまい日本、そんなに急いでどこへ行く」「注意一秒、怪我一生」にはじまり、「〇〇月間」「〇〇週間」「〇〇の日」などなど。〇〇には「緑化」「愛鳥」「発明」「原子力」「耳」や「歯」「歳末たすけあい運動」「灯台記念」までもある。くわしくは「広報歳時記」という政府の出版物をみると、行事に際して「標語」を募集したり、使用したりするのは日本人独自の行動様式であることが理解できる。くわえて「ヨイショ」「コラショ」「ドッコイショ」という掛け声や囃子言葉は日本語独特の間投詞で外

国語には翻訳不可能である。つまり少なくとも欧米の人間などには絶対と言つてよいほど見ることができない日本人の特殊な行動様式である。荒木は「日本人がいかに古い〈こと〉から新しい〈こと〉に移って行く場合に、必ず一旦立ち止まり、古い〈こと〉と決別しながら、新しい〈こと〉に立ち向かうというところがある。その移行の過程において、ある種の〈ことば〉や呪言を発することによって、〈こと〉の移行を成就せしめようとするのである」と説明した後、欧米には全く見られない日本の列車の出発風景に、新しい「こと」への出発に際しての発車のベルは古い「こと」に訣別し、新しい「こと」に立ち向かってゆく哀愁と決意が見られ、JRが盛んにやっている「指差呼称」という現場での行動指針や、列車内のチャイムにはじまるアナウンスの意味解釈にまで日本独自の「こと」解釈を敷衍してゆく。

「ものがたり」としての「元の理」は、すべて行きつくところ教祖が「元の理」を「こと」化されたところのひながたの道や、「元の理」の人間創造救済説話である独自の不変の「ものがたり」の思想に還元される。そしてその教えは初代布教師につながったすけに浴した信者にとっては、たすけの直接の布教師個人があらわにした天理の教えの「ものがたり」を実証する枝分かれた根源的不変の法則・真実であるところの「ものがたり」として展開されてゆく。ものがたりの「もの」が「こと」化することによって、場合によっては異端と言われるような派閥的なものや、信者の集団が講社として集合体となり、歴史的な律的経過を経て現在では布教所、教会などといわれている社会的組織となる。教会とは「ものがたり」のシステムを持った法的に規制された入れ物であるが、その不変の教理・法則である「ものがたり」を正しく「こと」化しえない教会は天理教では事情教会という名でよばれる。つまり、教会とは「もの」を「こと」化する目的を持つシステムであるからである。

教えの「こと」化から出来上がった教会とは建物(たてもの)ではなく、見えない不変の法則・教えである「もの」を「こと」化できているかどうか問われている場所(ところ)であり、それはひとつの天理教会本部という総体的組織形態にとりこまれることとなる。いかなる宗教団体であれ、それが変転する時代に存在する社会組織であるかぎり、組織の長(教会長)や役員組織の組織経営力に知力、そして決断力が問われ責任は当然としてある。また社会における科学技術や価値観等の進化変転によって既存の組織形態が的確に対応できず複雑化したとき、「もの」の「こと」化が時とともに後退し変形して行くのは既成の世界の諸宗教団史を振りかえるまでもない。問題は「もの」の「標語」的反复循環の輪からとびでる「こと」化への命を懸けた勇断のあるなしであろう。「もの」の「こと」化は無為自然に獲得することはできないし、的確な「こと」化への時は人間の逡巡を待たないからである。よって問題は、抱える課題を組織内で保守土俗的、慣習的雰囲気から離脱し真剣に談じあわれ、個々の宗教経営者自らが範を示すことなくしては、改革は「もの」の「事」化ではなく、「指差呼称」的な表層的「言」化の反復におわる。その先に見えるのは、根が腐って枝葉が枯れると譬えられる末端組織形態のさまざまな「事情」の姿であろう。